私の自慢（クッキング編）　ー丸峰区ー

K.Yさん

お菓子作り名人のK.Yさんの作品の一部です。
左上から順番にケークサレと大福、栗蒸羊羹
いろいろおはぎ、オレンジピール、ブラウニー。

T.Tさん

T.Tさんは季節の食材を使った料理が得意です。
左から栗の渋皮煮、レンコン炒めトロリチーズがけ、
黒豆煮(おせち用)。

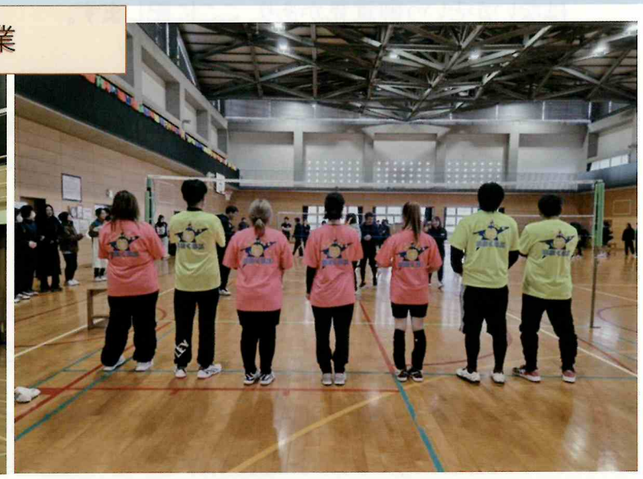
※「私の自慢」と題して、大倉各区の自慢の一品を紹介する記事を載せることとしました。
今回は丸峰区のクッキング自慢を紹介しました。今後、各区での自慢の一品を紹介していきたいと考えております。つきましては、いろいろ情報のご提供をお願いいたします。
（例　：　自慢の巨木、自慢のコレクション、自慢の風景、自慢のガーデニング　etc）

問合せ 連絡先	佐原市民活動支援センター	電話：０４７８－５０－１２１３ FAX：０４７８－５４－７７０８

大倉まちづくり協議会だより
（2026.3.1発行）

福祉子ども部会 ヘルスバレー教室事業

▲毎週金曜19時から実施している練習の様子



▲第1回KATORI健康排球大会　大倉大人チーム

▲香取市スポーツレクリエーション大会　大倉子どもチーム

地域結合の象徴としての髭撫祭

大倉まちづくり協議会会長　三津越昌幸

私は、髭撫祭に一度だけ消極的に参加させていただきましたが、入っていた組自体も脱退し、何の発言資格はございません。しかし、祭の存続が危うい状況だとアンケートで知り、私はこれまで髭撫祭に無関心であったことを大変申し訳ないことだと反省しております。その上で、あえて私の思いを下記のようなものをアンケートに添えました。大倉在住の方々へお知らせすべきではないかという御意見があり、ここに記します。

1　緊急事態の認識

まつり本来は大倉在住の氏子による宗教的儀式→今は鎌倉時代から続く歴史的伝統文化氏子十八組→各組の存続が危うい。大倉人口の過半数が新住民。大倉内外に広く参加者を募るべきだ。

2　まつり当番の確保

令和9年度実施のために組の再編を行う→再編しても数年後も同じ問題が起こる：根本的解決策にならないが、再開するためには当面必要。将来的展望について討議を重ねる。

3　まつり本来の目的や意義の共通認識が必要

髭撫祭本来の目的は何か：オビシャ→村落共同体でその年の豊作を祈るまつり。
まつりとはハレ（晴れ、非日常の特別の日）の場。ケ（日常生活）では村落共同体の狭い社会のなかでのストレスがたまる。これをケガレ（気が枯れる、穢れ）という。ケガレを晴らす場がまつり。まつりとは「ストレスを吹き飛ばす場」・「人と人とが心からつながる場」というわかりやすい共通認識が必要である。

日本文化は「不易流行」（本質を変えず、時代に合わせて変化するもの）である。
日本で最も有名な京都祇園祭の「山鉾巡行」は外国人が参加。佐原の大祭は昔から周辺地域民を動員。

4　まつり本来の本質を変えずに、存続のため変える必要があるものは何か

村落共同体の抱える問題は①高齢化②地域の担い手の減少（人口減少）③資金：経済力の流出。

①、②について、「髭撫祭」は高齢の参加者や舐める程度しか日本酒を飲めない参加者は大変なストレス。また、準備する物なども困難化している。一杯の酒量を大幅に減少・マニュアル化・専門職グループ化等検討。外部参加者を導入する。

③について：市指定無形民俗文化財→市の援助を求める。クラウドファンディングを募る。香取市内の醸造業数社の後援など様々なアイデアを募り検討する。

5　外部からの祭り参加者は「まつり」本来の意義に合っている

「マレビト」（客人）という外部からの来訪者を受け入れることで共同体は浄化され、活力がもたらされてきた。その受け入れの儀式を「まつり」という。（折口信夫）

⇦ 昭和30年代前半のひげなで祭り（受け当番18番組？）

6　魅力の向上と情報発信

①鎌倉時代から続く伝統文化の継続を訴え、天下の奇祭であるというユニークさをアピールする。

②観光協会・市の商工観光課・生涯学習課・市民協働課と連携：「広報かとり」で実施予告や参加募集・ポスター制作（東京駅・千葉駅などに貼る）、シャトルバス運行、香取神宮や佐原の歴史的家並みと連携等。若い人にはSNS等活用。

③高い目標を持つ：現在、市無形民俗文化財→県指定→国指定→ユネスコ登録を目指す。髭撫祭と同じくらいの歴史がある光町の「鬼来迎」はユネスコ登録まで行っている。佐原の大祭もユネスコ登録済み。

7　先の見えない時代だからこそ「髭撫祭」が必要

都会では「隣は何をする人ぞ」と孤立している。村落でも、同様。人と余り接しないことからくる人間不信・物価高や収入減による経済的不安・職場での人間関係等ストレス社会。また、大震災の不安や国際情勢の変化・外国人居住者の増加等、諸問題を吹き飛ばす一つの契機として、祭りがあるように思える。

8　まつり存続は地域住民の意識次第

神職養成の大学として有名な國學院大學に観光まちづくり学部が近年創設されました。「地域社会を結び付ける力としての祭り」という視点から同学部小林稔教授は「何よりも続けたい、絶やしたくない、絶やせないという地域の自覚や覚悟があってのこと。このようにして祭りは今後も変化を遂げながら、そのうえで地域文化の明日を担う創造の要になっていくと私は考えているのです。」と述べています。（國學院大學HP）

⇧ 近年の髭撫祭の様子